



亀中だより

No. 13 令和3年7月16日 文責: 岡田



For The Students!



8月3日に亀山市文化会館で開催される2021年度第88回 NHK 全国学校音楽コンクール(三重県コンクール)に3年生有志が出場します。亀山中学校では古くから全校合唱へ取り組み、毎年の文化祭でも合唱コンクールがそのメインを飾っています。そうした経験を生かして、3年生の有志がそれぞれの部活動もある中で名乗りを上げてくれました。他の参加校は合唱部などで活動している学校ばかり。強敵ぞろいですが、亀中らしい合唱を聞かせることでしょ!なお、この合唱の伴奏者は本校卒業生の伊藤慶佑さんが担当していただきます。伊藤さんは現在ピアニスト、作曲家、クラリネット奏者として活躍されています。

亀中生がアナウンサーに!

亀山市の行政情報番組「マイタウンかめやま」に亀山中学校から2人の生徒がアナウンサーとして登場します。毎年夏休みに行われる特別企画ですが、今年は3年生の大澤洸希さん、上野静さんが出演することになりました。二人の出演は8月6日(金)~12日(木)で午前6時から午後0時まで30分番組をリピートで放送されるとのことです。みなさんお楽しみに!



1 学期が終わります。夏休み前におすすめの一冊から...

まもなく1学期が終わろうとしています。コロナ禍が依然として続く中、修学旅行を延期するなど不安定な学校運営を強いられてきたことは否めませんが、皆様のご理解により、学期末を迎えることができましたことに感謝いたします。ありがとうございました。

さて突然ですが、子どもが親と遊ばなくなるのは、何歳くらいからでしょう。私事ですが、2人いる娘もそれぞれ仕事に就き、いわゆる子育ての終わった家庭です。幼いころは遊び相手が親であることも多かったのが、いつのまにか遊び相手は同級生などの友達に変化していきますよね。

そんななかで先日何年ぶりでしょうか、娘に“遊び”に誘われました。「打ちっぱなしにつれてって!」と。ゴルフに興味を持ち始めたらしく、練習したいとのことでした。この子が小さかった時は、こちらは部活指導に明け暮れて、休日もほとんど遊んでもあげられなかった懺悔の念も持ちながら、久しぶりに親子で同じことをする時間をもらうことができました。そんな私が、親子のことを考えるとき、いつも思い出す一文があります。保護者のみなさんにとってもきっと心を揺さぶられるところがあると思います。ご一読ください。(裏面へ)

「父は忘れる」 リビングストン・ラーネッド

坊や、きいておくれ。お前は小さな手に頬をのせ、汗ばんだ額に金髪の巻き毛をくっつけて、安らかに眠っているね。お父さんは、ひとりで、こっそりお前の部屋にやってきた。今しがたまで、お父さんは書斎で新聞を読んでいたが、急に、息苦しい悔恨の念にせまられた。罪の意識にさいなまれてお前のそばへやってきたのだ。

お父さんは考えた。これまでわたしはお前にずいぶんつく当たっていたのだ。お前が学校へ行く支度をしている最中に、タオルで顔をちよとなでただけだといって、叱った。靴を磨かないからといって、叱りつけた。また、持ち物を床の上に放り投げたというのは、どなりつけた。今朝も食事中に小言を言った。食物をこぼすとか、丸呑みにするとか、テーブルに肘をつくとか、パンにバターをつけすぎるとかといって、叱りつけた。それから、お前は遊びに出かけるし、お父さんは停車場へ行くので、一緒に家を出たが、別れるとき、おまえは振り返って手を振りながら、「お父さん、行っていらっしやい!」といった。すると、お父さんは、顔をしかめて、「胸を張りなさい!」といった。



同じようなことがまた夕方に繰り返された。わたしは帰ってくると、お前は地面に膝をついて、ビー玉で遊んでいた。長靴下は膝のところが穴だらけになっていた。お父さんはお前を家へ追いかえし、友達の前で恥をかかせた。「靴下は高いのだ。お前が自分で金をもうけて買うんだったら、もっと大切にするはずだ!」これが、お父さんの口から出た言葉だから、われながら情けない!

それから夜になってお父さんが書斎で新聞を読んでいる時、お前は、悲しげな目つきをして、おずおずと部屋に入ってきたね。うるさそうにわたしが目をあげると、お前は、入口のところで、ためらった。「何の用だ」とわたしがどなると、お前は何もいわずに、さつわたしのそばに駆け寄ってきた。両の手をわたしの首に巻きつけて、わたしに接吻した。お前の小さな両腕には、神さまがうえつけてくださった愛情がこもっていた。どんなにないがしろにされても、決して枯れることのない愛情だ。やがて、お前は、ばたばたと足音をたてて、二階の部屋へ行ってしまった。

ところが、坊や、そのすぐ後で、お父さんは突然なんともいえない不安におそわれ、手にしていた新聞を思わず取り落としたのだ。何という習慣に、お父さんは、取りつかれていたのだろう!叱ってばかりいる習慣—まだほんの子供にすぎないお前に、お父さんは何ということをしてきたのだろう!決してお前を愛していないわけではない。お父さんは、まだ年端もゆかないお前に、無理なことを期待しすぎているのだ。お前を大人と同列に考えていたのだ。



お前の中には、善良な、立派な、真実なものがいっぱいある。お前の優しい心根は、ちょうど、山の向こうからひろがってくるあけぼのを見るようだ。お前がこのお父さんにとびつき、お休みの接吻をした時、そのことが、お父さんにははっきりわかった。ほかのことは問題ではない。お父さんは、お前に詫びたくて、こうしてひざまずいているのだ。お父さんとして、これが、せめてものつくないだ。昼間にこういことを話しても、お前にはわかるまい。だが、明日からは、きっと、よいお父さんになってみせる。お前と仲よしになって、一緒に遊んだり悲しんだりしよう。小言を言いたくなったら舌をかもう。そして、お前が子供だということを常に忘れないようにしよう。



お父さんはお前を一人前の人間とみなしていたようだ。こうして、あどけない寝顔を見ていると、やはりお前はまだ赤ちゃんだ。昨日も、お母さんに抱っこされて、肩にもたれかかっていたではないか。お父さんの注文が多すぎたのだ。

「人を動かす」 デール・カーネギー 著 より